

当たり前

沖縄県立開邦高等学校一年 島袋 里音

「会いにきたよ〜」
少しのビスケットとジュースを持って
深く刻み込まれた名前を
しわくちゃな手で
そっとなでる
優しく
でもどこか悔しそうな表情で
涙をながすおじいの瞳には
七十九年前
何が映ったのだろう

沖縄戦の始まる二年前に生まれた僕
小さなカーラヤーで
毎日笑って
たたくさん泣いて
好きなのを好きだけ食べて
それが僕の当たり前だった

一九四五年四月一日
銃を持った兵隊さんが
たたくさんやっ来て来た
けたたましく鳴り響く
サイレンの音
怖かった
パパ、ママ、どこにいるの？
僕の「当たり前」は
一瞬にして壊された

僕の二歳の誕生日は祝われなかった
小さな暗いガマの中で
笑うこともなんかできなくて
泣くことも許されない
食べれるものは
何だって食べた
いつしかこれが
僕の「当たり前」になった

目の前に広がる
無数の死体
みんな何も言わずに踏んだ
「かわいそう。ごめんさい。」
そんなことは思わなかった
だってそれが
僕の当たり前だから

道に落ちていっているもの
誰かの食べかけ
死んだ虫
雑草
食べれそうなものは何だって食べた
だってそうしないと
死んじゃうから

気がつくと
お姉ちゃんがいなくなっていた

少し寂しかったけれど
涙は出なかった
だって大好きな人が
いなくなっていくのが
僕の当たり前だから

赤く染まった海
黒い空
サイレン
銃声
血の匂い
何か分らないけれど口に入れた物の味
人に触れたときの冷たい感触
僕の五感に刻まれた
「当たり前」

あれ？
僕の当たり前って
こんなのだったっけ？
ふと脳裏によぎる
昔の光景
戦争がなければ
戦争さえなければ

僕は戦争を憎んだ

もう八十歳を過ぎたおじい
戦争体験者が減っていく中
私たちにできることは
戦争体験を聞くこと？
それを後世に伝えること？
平和を祈り続けること？
私たちが何十年間も
それらをやり続けてきた
でも未だ
争いは絶えない
次々と起こる戦争
もう戦争が絶えることは
ないのかもしれない
時々思う
でもこの島で生まれ育った
私たちがだからこそ
七十九年前の人々が
渴望した明日を生きている
私たちがだからこそ
戦争撲滅を諦めてはいけな
切に思う

おじいの涙は
訴え続ける
これまでも
これからも
世界平和が
「当たり前」
になることを願って